

## 中学生の書く行為に着目した国語科における読者反応の支援

勝 田 光

### 1. 問題の所在と研究の目的

読者反応理論は、主に文学的文章を対象とする読書において、読者一人ひとりが作り出す意味を大切にしている理論である。国語科で読者反応理論が注目された意義は(1)「読書」という行為を書く行為まで含めて捉えるようになった点、(2)他の人と一緒に本を読むことを大切にするようになった点、以上二点にあると考えられる。ただし、読者反応理論に基づく授業実践に向けて、以下の二つの課題が残されたままである。

一つは、教師は生徒一人ひとりが意味を作り出す過程にどう関われば良いか、という課題である。読者反応理論に基づく読むことの学習指導において、教師は生徒たちが示した解釈の成否を評価する役割よりも、生徒たちが理解を深めたり新しい解釈を示したりすることを支援する役割が期待されている。後者の教師の役割について、最も広く受け入れられている考え方は、米国のリテラシー教育学者ピアソンらが提示した「教師から生徒へ読むことの責任の段階的移行」だった。しかし、近年、他のリテラシー教育学者から教室という場で生徒の読みを支援する教師の役割は、ピアソンらの提案が暗示する静的・固定的なものではなく、もっとダイナミックな役割であるはずだ、と批判されている。日本の国語科では、生徒たちの読みを大切にするという理念が先行するあまり、そもそも先述の「教室における読書において、教師はどんな役割を担うのか」という点をめぐる議論がほとんど行われてこなかった。読者反応理論に基づ

く読むことの学習指導における教師の役割について、米国を中心とした先行する議論を踏まえながら、日本の国語科という文脈で具体的に検討することが第一の課題である。

もう一つは、指導過程に物語創作活動をどう位置づけるか、という課題である。読者反応理論に基づく読むことの学習指導では、生徒たちがより深く考えるために、また、生徒たちがクラスメイトと自分の読みを交流するために書く活動を大切にしてきた。この書く活動の中には、読書日誌に本のタイトル、作者名、感想、疑問点などを記録することに加えて、単元の最後に生徒たちが授業で読んだ一連の文学的文章を踏まえて新たな物語を創作することが多い。ところが、国語科教育学者が米国を中心とした読者反応理論に基づく読むことの学習指導の方法—例えば、ブッククラブ—を日本に輸入した時、この創作活動にほとんど注目していなかった。仮に諸外国の指導方法をそのまま輸入しないにせよ、感想文を書く活動と物語創作活動では、生徒たちの読み書き学習にどんな違いが生じるのかを検討した上でなければならぬだろう。これまでの国語科を中心とした読むことの学習指導において、あまり行われてこなかった物語創作活動の効果や、物語創作活動を指導過程にどう位置づければ良いかを検討することが第二の課題である。

以上、本研究では、「教師」と「物語創作活動」という二つの要因に着目して実証的な検討を行い、読者反応理論に基づく読むことの学習指導の実践に向けた知見を得ることを目的とする。

## 2. 研究の方法

本研究では、教室の読書について、生徒たちが文章を読んだ後、自分の解釈について教師やクラスメイトと話し合い、一貫性のある意味を作り出す意味交渉過程として理論化したラデル&ウンラウの読書モデルに基づいて五つの調査を行った。

【調査1】教師の生徒たちへの関わり方を検討するために、どんな観点から教室の読書を観察すれば良いか

【調査2】生徒の読者反応を支援する教師の役割はどのようなものか

【調査3】「読み書きが苦手」な生徒が授業を通して読みを深めるためにどんな支援が必要か

【調査4】物語創作課題は、生徒の読みを豊かにする効果があるか

【調査5】まず生徒が物語を創作した後、文学的文章を読む授業は成立するか

【調査1】～【調査3】は「教師」の要因を検討するために行った。【調査4】～【調査5】は「物語創作活動」の要因を検討するために行った。

## 3. 概要

序章第1節では、読者反応理論に基づく読むことの学習指導の実践に向けた課題を二点指摘し、「教師」と「物語創作活動」という二つの要因に着目して実践化に向けた知見を得るという研究目的を述べた。序章第2節では、イーザー、ローゼンブラット、ラデルらの読書理論を検討し、本研究が教室の読書をどう捉えるかを定義した上で、調査の枠組みとしてラデルらの読書モデルを用いることを述べた。序章第3節では、生徒たちの読みを捉える手法の変化、生徒たちの読みの発達、教室における読書の特徴、物語創作活動の意義、以上の項目に関連した調査研究をレビューした後、先行研究に残された課題と本研究の特色を述べた。序章第4節では研究の方法、序章第5節では各章の概要をそれぞれ述べた。

第一章では、「教師」の要因を検討する時の調

査課題を設定するために、筆者が行った「サーカスの馬」(安岡章太郎)を読む授業の事例分析を行った。話し合い場面における談話の分析により、当時、教師としての筆者は、従来の「解釈や型通りの反応を教える」タイプの教師から離れるために個々の生徒の読みを評価する役割を他の生徒に委ねていたと考えられる。しかし、それだけでは生徒たちが読みを深めたり新たな解釈を生み出したりする話し合いにならないことが示された。また、話し合いで論点になったテーマと、その後、生徒が書いた感想文の関係を分析した結果、生徒たちが話し合いの論点を踏まえて感想文を書くことの難しさも示唆された。以上の分析と考察により、第一章では、【調査2】と【調査3】の調査課題を定位した。

第二章では、生徒の読者反応を支援する教師の役割を調べるために、「生徒一人ひとりが作り出す意味を大切に」授業を継続して実践してきた教師による全19時間の授業を観察した。その結果、生徒の読者反応を支援する教師の役割には、(1)文学を読む集団として教室全体を調整する役割、(2)生徒が反応を生み出せるようにする役割、(3)生徒が反応し続けることを励ます役割、(4)生徒の反応を広げたり深めたりする役割、(5)一読者として自分の反応を示す役割、以上五つの役割が含まれることを明らかにした。こうした役割は、生徒の活動場面に応じた固有性を持つ一方、生徒とのやり取りの中でダイナミックに変化することも明らかになった。

第三章では、「読み書きが苦手」な生徒が授業を通して読みを深めるためにどんな支援が必要かを調べるため、小グループの話し合いを重視する授業を継続して実践してきた教師による全11時間の授業を、「読み書きが苦手」と教師から認識されている生徒に焦点を当てて観察した。その結果、たとえ「読み書きが苦手」と教師から認識されている生徒でも、適切な支援があれば読みを深めて自分なりに意味を作り出せることを示した。その過程においてどんな支援がなされたかを分析し、(a)情緒面に関する支援、(b)形式面に関する支援、(c)内容面に関する

支援，以上三つのカテゴリーに大別できる全13種の支援内容を特定した。

第四章では，読むことの学習指導における物語創作活動の効果を調べるために，「新しいお話を作る」という学習目標のもと物語創作課題を与える授業と「く読み」を広げたり深めたりする」という学習目標のもと自由記述課題を与える授業をそれぞれ附属中と公立中の二校で行った。それぞれの授業で生徒たちが書いた文章を分析した結果，「新しいお話を作る」ために文学的文章を読んで物語を書くタイプの授業の方が，生徒たちの記述量は多く，他の生徒と異なる内容で文章を書く傾向も見られることを明らかにした。加えて，他の生徒と異なる内容で文章を書いた結果，小グループでお互いに書いた文章を交流する場面が活性化する効果もみられた。

第五章では，物語創作活動を指導過程のどこに位置づければ良いかを調べるために，【調査4】と異なり，まず生徒たちが物語を創作した後，文学的文章を読む授業を構想・実践した。生徒たちが書いた創作文を分析した結果，多くの生徒たちは，物語創作に関する指導を受けたり文学的文章を読んだりしない段階で，物語全体を統括する主題を持ち，脈絡のある物語を書けることを明らかにした。加えて，授業後のインタビュー記録と合わせて一人の生徒の学習過程をより詳しく分析した結果，(1)物語内の出来事に対して情動的な関わりや個人的な関わりを持つようになった，(2)物語の構造に対する意識が深まった，といった学びが成立していたことも明らかにした。つまり，第五章では，文学的文章を読んだ後に物語創作活動を行うのではなく，まず物語創作活動を行ってから文学的文章を読む授業も効果的な学びとなり得ることを示したのである。

終章第1節では，各章で得た知見をまとめ，国語科を中心とした教室の読書における支援のあり方について，「教師」と「物語創作活動」という二つの要因を中心として総合的に考察した。終章第2節では，本研究の展望について，本研究で扱わなかった，説明的文章を対象にした教室の読書について述べた。

#### 4. 本研究の意義

1982年にイーザーの『行為としての読書』が邦訳・出版されて以降，国語科教育学の領域において，読者論・読者反応理論をテーマにした読むことの学習指導の実践・研究は数多くある。また，国際的なリテラシー教育研究に視野を広げても一例えば，この分野で最も権威がある学術誌 *Reading Research Quarterly* の編集長が50周年を記念する本誌の前書きの中で，読者反応理論をよく行われた研究テーマの一つとして挙げたように一研究の蓄積が多いテーマである。その意味で，本研究のテーマ自体は新しいものではない。

しかし，本研究では，「1.問題の所在と本研究の目的」で指摘したように，国際的なリテラシー教育研究の文脈で活発に議論されてきたにも関わらず日本の国語科教育学研究の文脈ではほとんど議論されてこなかった点と，米国で開発された指導法を日本に輸入する時に捨象された点に着目して，日本の中学校の国語科をフィールドにして複数の調査を行った。その結果，これまで国内の議論の中であまり注目されてこなかった，「教師」と「物語創作活動」という二つの要因が生徒たちの読みに大きく影響することを明らかにした。とくに，教師がどのような関わり方をすれば生徒たちの読みを深めることにつながるのか，なぜ物語創作活動が生徒たちの読みの多様性を促すのか，といった授業実践に資する知見を得た点に本研究の意義がある。

(学位取得年月日：平成28年3月25日)